The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多文化共生のために言葉が果たす役割
Author(s)	サコ, ウスビ
Citation	EX ORIENTE. 2025, 29, p. 19-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◎特集　言葉を究めて世界へはばたく
—第 1 回大阪大学外国語学部・外国学専攻シンポジウム講演録—

第 1 回大阪大学外国語学部・外国学専攻シンポジウム
日時：2023 年 10 月 21 日（土）13：00 ～ 16：25
場所：箕面市文化芸能劇場大ホール

基調講演 2「多文化共生のために言葉が果たす役割」

ウスビ・サコ

1. 私が生まれ育った環境

私はマリ共和国で生まれた。高校卒業と同時に中国に渡り、6 年間ほど大学などで学んだ後、日本に渡って 32 年になる。その間、出張や勉強でいろいろな国を旅する中で、自分の立ち位置を考えさせられる経験が多くあった。時には自分は難民ではないか、移民ではないかと思う経験もたくさんしてきた。

というのも、私は 2002 年に日本国籍を取得したのだが、私の日本のパスポートには出生地は書かれておらず、本籍地しか書かれていないのだ。それを持っていろいろな国に行くと、日本のパスポートに「ウスビ・サコ、京都」と書いてあるので、何かおかしいなと思われるのだろう。このようにわれわれは生活する中で、先入観や決めつけが結構多いと思う。

私が生まれ育ったのはマリのバマコで、私は 3 人きょうだいの長男である。マリでは子どもの多い家庭が多く、私たちの家族は人数が少ない方だったのだが、お客さんは結構よく来ていた。お客さんといっても父の田舎の隣村の知人だったり、ほとんど縁がない人たちだったりするのだが、用事があるからと言って都市部に来て、わが家に来るのだ。

ただ、とても面白かったのは、その人たちがいつの間にかわれわれの教育者になって、説教したりアドバイスしたりするのである。アフリカでは多くの場合、人が集まると教育者が増えていく。恐らくかつての日本の地域社会にもそうした光景があったのではないかと思う。

マリはかつて、ガーナ王国、マリ帝国、ソンガイ帝国が次から次に存在した場所であり、言葉が非常に強い力を持っていた。複数の民族が住んでいて、文字を持っていなかったのだが、一緒に国をつくる過程で憲法まで作った。それが無形文化遺産にも登録された「クルカン・フガ憲章」である。主に口頭形式ではあるが、世界で最も古い憲法の一つであり、愛、平和、友愛のメッセージを発信している。

この憲章において重要な役割を果たしていたのがグリオという世襲制の語り部たちである。マリ社会では、一定のグループの人たちが歴史を覚えて次の世代に伝え続けるという歴史がある。例えば音楽にしたり詩にしたり、山極先生の言葉を借りればいろいろな形で共感できるように語っていったのだと思う。

マリは 19 世紀、フランスによって植民地化された。公用語はフランス語だが、23 以上の民族があり、民族の言語が 30 以上もある。民族同士の言葉は地域や家で使ってもいいのだが、学校に行くとフランス語を使う。

私自身はソニンケという民族の出身だが、マリで生活していく上ではバンバラ語、フランス語、ソニンケ語をマスターする必要がある。バンバラ語は文字を持たない言葉として覚え、フランス語は文字を持つ言葉として覚えた。しかし私は日本語を覚える過程で、文字に頼れないという経験をたくさんした。というのも、日本語は非常に文脈型の言葉であり、文法や文字が分かるだけではしゃべれなくて、文化も理解しなければならないからだ。そういう意味で、マリの言葉と同じように身体化する必要があった。

マリの言葉は文字を持たないので、私たちは音とイメージで言葉を認識する。文字を経由しないので、言葉の覚え方は少し特殊である。フランス語、英語、ロシア語を勉強したときは、自分の日常生活と離れた文化の言葉になるので、フランス語がいくら自分の公用語だといわれても、話している内容が日常

にないのだ。食べ物にしても、町の名前にしても、道の名前にしても、現象にしても、怒り方にしてもよく分からない。しかし、われわれはそれをまねして、あたかもフランス人かのように偉そうにしゃべったり怒ったりしていて、今となってはすごくいい役者をしていたと思う。

マリは、フランコフォニーというフランス語圏に属するのだが、学校のドロップアウト率がとても高い。小学校のときに成績が悪い人は 3 回目の留年で退学させられる。小さい頃、自分の日常生活と全く異なる言語で強制的に勉強させられても、その価値をあまり感じない人たちが多かったと思う。だから、小さい頃は非常に多かったクラス数もどんどん少なくなっていった。それでも、何となく勉強は重要だと思って勉強し、人数が多いときは日本の ODA によって作られた 150 以上の小学校で学んでいる人も多いです。

私たちは、非常に悩ましい多重人格の教育を受ける。学校へ行くと、自分の民族や地域の言葉を絶対にしゃべってはいけなくて、言語も雰囲気も全部フランスっぽくするのである。でも、家に帰ると「フランス語をそんなにしゃべるなよ」と怒られ、今度はマリ的なハイコンテクストな文化に戻る。従って、学校の内外で人と関わるときの雰囲気が違うので、面白いと思った。

もう一つ、私たちの教育において非常に重要なのが食べるときである。マリでは、食べるときは年功序列型で上の人が指示してから下の人が食べることが多いのだが、しゃべってはいけないので言葉が出てこないのだ。しゃべる権利があるのは、年を取った人だけである。私たちの食事は、上の人が「食べて」と指示しない限り、料理の肉や野菜などの具材に手を出してはいけない。小さい頃一番悔しかったのは、大人が指示を出すのを忘れたときだ。1 人でずっと食べていて、具材が残り少しというときに「君たち、食べないか」と言うのである。そういうずるい大人に早くなりたいとずっと思っていた。

マリには、「サナングヤ」という面白い文化がある。いつ始まったか分からないが、マリの人々が共存する中で、民族同士がお互いに支配しないという協定を結んだらしいのだ。それを証明するために、異なる民族の人たちが会うたびに冗談をふっかける。

私が一番ひどい経験をしたのが、日本からマリに帰ってきたとき、空港で入国審査官が私のパスポートを見ていきなり、「おまえは日本で逮捕されて逃げてきたな」と言うのだ。私が驚いていると、「おまえはサナングヤの文化も忘れたのか」と大変怒られたことがある。日本から緊張して帰ってきたのにそんなこと知るかという話なのだが、マリではそのように言葉を使って常に関係を再確認している。

それから、マリではあいさつに最低 3 分はかかる。「こんにちは」だけでは済まなくて、「よく眠れたか」「近所の人はみんな元気か」「職場の人はみんな元気か」と聞くのだが、いちいち答えなければならないし、こちらからも質問を返さなければならない。だから、私たちは小さい頃、走りながらのあいさつは絶対に駄目だと教えられた。でも、コロナ禍になってからは「職場の人は元気か」と尋ねるようなあいさつはすごく大事だと思った。このように私たちは、学問は学校で、倫理や道徳は地域で勉強してきた。

2. 言葉と言語

山極先生の話に関連付けて話すと、言葉と言語は違うのではないかと思う。子どもたちは遊んでいるときに言葉をしゃべっているが、言語ではないということを皆さんに認識してほしい。

私たちがいろいろなものを通して相手に自分の思考や価値観を伝えようとする行為が言葉だと思う。そういう意味で言葉は個と個の間のコミュニケーションである。言語になると、集団という位置を共有する構造化されたものになってしまう。言葉は自分一人の頭の中にあるものを相手に伝えるものであり、言語は特定の共同体において意味を持って構造化された伝達ツールだと思う。

ユネスコは、言葉は非常に重要だと言っている。言語の機能にはコミュニケーションとアイデンティティの表現、遊び・創造力の表現、感情の表現があり、言語と文化は他者に対する私たちの認識に寄与し、私たちがグループに属することを確認する手段でもあるとしている。そして、その土地固有の言葉や

言語がなくなっているという危機的状況であると指摘している。それによってわれわれのアイデンティティが失われているのではないかというのである。

私がなるほどと思ったことが二つあって、一つは生物の多様性と言語の多様性は密接に結び付いているということである。先住民のコミュニティは、自分たちが暮らしている環境を非常に深く理解している。私もマリの都市部に住んでいたとき、田舎に行くといかに自分がいろいろなものを知らないかということを教えられた。というのも、私がフランス語を勉強するときに名前が出てくる植物はほとんどマリにはなかったからだ。でも、マリにある植物は自分がいる都市にはないので、なかなかその言葉を覚えられない。

もう一つは、都市化が進むと言葉自体が変わっていったり、少し混ざることで貧困になったりするということである。グローバル化の影響で都市化が非常に進むと、アイデンティティにとっても問題があるということが指摘された。

さらに、ICT によっても私たちの言葉は変わっている。省略化したり、別のもので代替したりしている。ICT によって確かにコミュニケーションは飛躍的に増大したが、実はそこにたくさんの問題があると指摘されている。例えば、世界的に有名なファストフードチェーン店の写真を相手に見せれば、私が説明しなくてもどんな内容の写真なのかは分かる。それだけ私たちはいろいろなものをネットで共有していると同時に、実はこれを自分の言語で通訳できないという問題がある。

3. グローバル化概念の整理

そこで、もう一度グローバル化について考えたいと思うのだが、私が学生たちに「グローバル化とは何か」という質問をすると、英語、世界、国際文化、SDGs、SNS といった答えが返ってくる。

グローバル化とは何かというと、ヒト、モノ、カネ、そして情報が国境を越えて自由に行き来することであり、ここで一番重要なのは、それらの価値は一国の判断で決められないということだ。一つの文化の中で物事の価値は決めら

れない。これまで持っていた言語や社会の価値は、グローバル化によって非常に違う次元になってしまう。

グローバル化の中で最も重要とされている要素は多様性である。多様性とは、人種、性別、宗教、性的指向、社会的・経済的背景、民族性の個人間の違いを認識することである。われわれは学校や職場でこの言葉を使う中で、マイノリティを優遇さえすれば多様性が守られていると考えがちなのだが、一番重要なのはマジョリティの意識改革である。マジョリティが多様性をどのように考えて、自分の立ち位置をどう考えるかが重要であり、自分のアイデンティティは相手と違うのに、それを無理矢理同調してしまうことがあると思う。

それから、多文化主義という話もよく出てくるのだが、多文化主義は複数の文化的伝統が社会で受け入れられるだけでなく、それを促進する環境をつくっていく。つまり、多様性は個人間の違いを指し、多文化主義はそれを受け入れる環境をつくるということである。

グローバル化が進むと、われわれの固有の文化がなくなるのではないかという懸念がある。特に私が懸念しているのは「世界のマクドナルド化」である。グローバル化の中で問題になるのは、固有の特徴である言葉や生き方、環境との共生が失われていくことである。それから、コミュニケーションにおける課題がある。AI、IoT、ロボットなどさまざまな技術が発展する中で、コミュニケーションのスピードは確かに速くなるのだが、われわれ固有のコミュニケーションスタイルが失われつつある。さらにグローバル化が進むと、私たちはお互いに理解が深まると思う一方で、地域紛争、民族対立、差別の課題も深刻になると考えられる。

4. 日本とマリの言語習得環境の違い

言語習得の環境をマリと日本で比較してみたいと思う。日本の場合、子どもが家の中心にいて、母親、父親、時間、環境の全てが子どもの周りにある。子どもと外がつながるときには、学校に行っている子ども同士がつながってその

家族がつながっていくという形で、子どもの言語の思考法はこのサークルの中で育つのではないかと私は勝手に考えている。最近、自分の学生たちが子どもたちを連れて私のところに来るのだが、その大きな理由は、自分のサークル以外でいろいろな人と交流する機会があまりないからである。

マリはどうかというと、隣の人が違う民族であり、真向かいの人もまた違う民族である。でも、私たちは関わり合いの中で、家に限定しないで、家を超えて結構いろいろな所に行く。そうすると、私たちの言語感覚はかなり家を超えて、地域の中で使われている複数の言葉をわれわれの中で身体化していくような現象が起こる。

私はミシマ社というところから、自身の母語についてインタビューされたことがある。ちょうどその頃、国立民族学博物館で言語の展示をしたので、私が寄せたメッセージを皆さんと共有したい。

私が生まれた環境は、祖父も祖母も違う言語をしゃべるし、やって来る人たちも違う言語をしゃべる。私が生まれたマリの首都バマコではバンバラ語を使い、セグーにいたときもバンバラ語だったのだが、学校はフランス語で、その後は第一外国語が英語、第二外国語がロシア語、コーランを読むときはアラビア語を使い、そして中国、日本に渡った。すると、私は母語といわれてもピンとこなかったのである。恐らく自分の中での言葉の集合体が風景になって、それが自分の母語だと思ったのだろう。

その中で、私がどの段階でどの言葉を覚えたかという私の言葉の多様性を表現しようとした。私の子どもたちは日本で生まれたのだが、妻の仕事の関係で家族で中国に渡り、なぜか子どもたちは中国のフレンチスクールに通った。外国人ばかりが住んでいる団地に住み、そこには複数の言語があった。彼らは日本語を母語としているのか分からないが、下の子が 8 カ月だったのでいろいろな言葉を覚えた。

一番大変だったのは、私の母親が 4 年間ほど、私の妻と子どもたちと一緒に住んでいたのだが、母は学校に行ったことがなく、断片的なフランス語とバンバラ語しかしゃべれなかった。私の妻も断片的なフランス語ならしゃべれて、

お手伝いさんは中国語しかしゃべれなかった。

このメンバーが一緒に生活する中ですごいマジックが起こったのだ。私の母がお手伝いさんに買い物の指示をするのだが、意味が分からない言葉で伝えていたらしいのである。さらに、私が帰ると母が「中国の田舎は生活が大変だね」と言うので、「行ったのか」と聞くと、「お手伝いさんと対話して分かった」と言うのである。どんな言語で会話したのかは知らないが、言葉というのは文法が分からないと伝えられないと思っていたのに、この家族の生活を見ると言葉はいろいろ多様なツールを持っていて面白いと感じた。

5. 異文化認識と文化スキーマ

先ほど山極先生の話の中にコミュニケーションの課題も出ていた。私の子どもを友だちが訪ねてきたのだが、ずっと面と向かわずに横に座って何かしているのである。夜、パジャマに着替えてもずっと横で座って何かしているのだ。私は友だちが遊びに来たら、一緒にサッカーをしたりして遊ぶのが当たり前だと思っていたので、「おまえたち、何しているの」と怒ったのだが、どうもオンラインゲームでこの場にいない友だちとつながって一緒に遊んでいたらしいのである。彼らが持っているコミュニケーションや世界観は、私がこれまで経験したものとかなり違うと思った。

そこで、コミュニケーションにはどんな課題があるのか、ある学者の言葉を共有したいと思う。まず、私たちが異文化をどう認識するかというと、違う文化の人が目の前にいると、その目の前の人で判断するのではなく、どちらかというとその人の背景に対する知識でその人を見てしまう。つまり、中国人が目の前に来ると、その人がいくらしゃべってくれてもとにかく中国人らしさを探そうとする。そういう「役割」を期待してしまうのである。

私は京都のおばあさんによく道を聞くことがあるのだが、「この場所にはどうやって行けばいいか」と聞くと、おばあさんの第一声は「英語、分からへんねん」なのである。「おばあさん、日本語です」と言っても、おばあさんは

「英語、分からへんねん」と言って、私が何を言ってもおばあさんの耳にたどり着くときには英語になっているようなのだ。つまり、私を見た途端、「英語は分からない」と言うのを決めているのである。実はこれが無意識の行為なのであり、異文化圏を一定のフレームに収めて見てしまうことがあるとされている。

日本のコミュニケーションについてエドワード・ホールは、直接的な言葉ではなく文脈や暗黙知を重視しながらコミュニケーションを取る文化がハイコンテクスト、それに対して言葉どおりの明確な意味に沿って論理性を重視しながらコミュニケーションを取る文化がローコンテクストであり、日本の空気はハイコンテクスト文化の最たる例であると言っている。ハイコンテクスト文化では、全部を言わなくても相手が理解してくれると期待する。でも、実は日本でも世代によってコミュニケーションの仕方が異なる。これはいろいろな人が集まるとよく問題になる話だろうと思う。

私は元々、地縁・血縁社会の研究が多いのだが、そこではかなりいろいろなものがつながっている。でも、都市化が進むと核家族化が進み、さらには家族の中でさえ分断している。この分断の中で言葉が果たす役割がかなり大きなポイントだと思って私は研究を進めている。意見を言わないのが美徳だとか、物事を批判的に捉えないとか、相手に合わせた方がトラブルが少ないとか、いろいろあるのだが、そうではない社会をどうつくるかということが非常に重要だと思う。

私たちにとってなぜフランス語がこんなに問題なのかというと、やはりフランス語は私たちの中で支配的な言葉になるからである。支配者の立場になると自分は有利だと思って、フランス語をしゃべる人は接する。同じような問題は、西洋が非西洋文化をどのように見てきたかというオリエンタリズムにも起こっている。

私がある実験で、いろいろな文化の人たちに「10 時 10 分はあなたにとってどういう時間か」と聞くと、概念がみんな違うのだ。10 時 10 分は、ランチを食べている、ブランチを食べている、教会に行っている、マーケットに行って

いる、平日であればほとんどの日本人は仕事をしていると答えるかもしれないが、このようにいろいろな文化の人たちが集まると、言葉そのものの概念が異なるということを皆さんにぜひ理解していただきたい。

異文化を受け入れていくにはどうしたらいいか、言葉がどういう役割をこれから果たしていくかということはとても重要なポイントであり、ユネスコはそのこともまた指摘している。さまざまな文化や背景を持った人たちが集まるときに、共通言語があるのかどうかが疑問だったのだが、実はないのである。みんな自分の近い相手に通じる言葉でしゃべるので、そこには英語が共通とか日本語が共通ということは必要なく、言葉は一対一の関係性を確認するツールだと思う。

オランダの文化人類学者ホフステードは、集団ができると文化は自然とつくられていくものだと言っている。伝統は受け継がれていくものとわれわれは思うのだが、文化は学習し合うものであり、構成員が変わると違う文化になる。

では、どうすればいいかというと、私はリベラルアーツで自分の学生たちに異文化体験をさせるのが一番早いと思っている。私のゼミでは学生たちをマリに連れて行き、マリのいろいろな人たちと交流させる。その中で彼らが経験するのは、自分の当たり前が通じない瞬間である。そのとき重要なのは、相手に自分の意思を伝えるときにかなりいろいろなものが見えてくるということだ。例えば日本の料理をマリ人に作ったとき、おいしさが通じないということもあったが、その中で学生たちは非常に生き生きとしており、帰ってくると伸びる学生がとても多かった。

恐らくこれはアイデンティティの問題であり、われわれが自分たちの文化の中だけで生きるということは、今はもうないのである。日常生活の中でいろいろな文化的事象が周りにあるわけだが、ここで大事になるのは私の軸とは何かということである。この軸が実は自分のアイデンティティであり、自分の言葉、文化、地域のことをしっかり理解するということにつながる。従って、絶対的なものとしてこのアイデンティティを再構築する必要があると私は思っている。

6. ソクラティック・ダイアローグの方法論

今は個が中心となる社会である。個の集合体の中でどうすればいいかというと、一番大事なのは自分と向き合うことである。自分と向き合える人は他者を受け入れられるし、向き合えない人は排他的になる。自信のなさの裏返しが排他的ということになる。では、何をしたらいいかというと、自文化をしっかり見定めた上で、身の回りの異文化を受け入れていくことである。だから、自分の足元をきちんと見ていこうと社会学者のリチャード・セネットは言っている。

つまり、もう一度意識的に言葉を持つということである。このときにソクラティック・ダイアローグが非常に重要だと私は考えている。基本的に知らない人でも少しずつ自分を紹介しながら相手を受け入れていくということである。私は何者なのか、あなたは何者なのか。私たちは何者なのかという自己の認識と他者の受け入れのプロセスが重要である。

そしてもう一つは、自分の言葉を持つことが非常に大切である。私は京都の自宅でよくパーティを開いて近所の人に怒られるのだが、大体パーティをした次の日、絶対に近所の誰かと出くわす。大体は「にぎやかでよろしいね」と声をかけられ、「うちは昔から学生さんが多いのは慣れてるけど、吉田さんはどう思わはるかな」と言われるのだが、「吉田さん」は知らない人である。あるいは、「この間スーパーに行ったとき、山本さんに会ったけど、サコさんのことを心配してはるで」と言われるのだが、「山本さん」も知らない人である。だから、自分の言葉でしゃべることはこれからは非常に肝心になると思う。私は学校でそういう実験をしていて、学生たちに 1 年生のときから無理矢理にでも他者としゃべらせている。

私はこれからの社会はコモンズだと思っていて、当事者同士が話し合ってつくっていかないと意味がないと思う。当事者同士が関わると、新しい文化もつくることができるし、言葉も大きな役割を果たすだろう。

これからフィールドワークに行く学生たちに伝えたいのは、まず異文化を体験して自分を見つめ直すことが非常に重要だということである。それから、異文化と触れることで日本の多様性と奥深さが見えてくる。そして、フィールドワークを通して自らを変える、メタモルフォーゼすることが必要である。他者と出会ったときに知らなかった自分を発見するし、知らなかった自分のポテンシャルに出会う。それを力にして新しい自分をつくっていくことが重要である。

私は学生たちによく「自分の変化を恐れるな」「問いを立てられる力を身に付けて」と言っている。自分一人ではないという意味のアフリカのことわざに、「早く行きたければ一人で進め。遠くまで行きたければみんなで進め」というのがある。これがこれからのコミュニティやコモンズをつくるカギだと思っている。